

1643年に平戸からポルトガル人が追放され、そこで交易を行っていたオランダ人は長崎の出島に移住することになった。当時のオランダの商館長はオランダ東インド会社のヘンミ（Hemmij, Gijsbert）で、交易の他に、将軍に外国の情報を提供していた。オランダ人は日本語を習得することは許されず、幕府の日本人が通訳を行い、オランダ商人と日本の顧客との間の取引はこれらの通訳を介して行われていた。その状態は1800年代の半ば位まで続いた。その後は米国のペリーの通商条約の締結の要求、その後も英国、ロシア、フランス等からも条約の締結の要求が為された。そこで米国の最初の大使タウンゼントハリスはオランダ語に堪能なヒュースケン（Hendrick Conrad Joannes Heusken）を通訳として、採用した。この二人は共に幕末に非業の死を遂げている。先ずはヘンミから。

彼は1798年、定期的な江戸訪問、将軍謁見後の長崎への帰路の途中、静岡県掛川で急死した。死因についてはいろいろの噂が流れた。①自殺説、②毒殺説 ③病気説がある。自殺説は当時取引は嚴重に幕府により管理されていたが、薩摩藩、もしくは江戸との違法の取引を行って将軍の怒りをかって、交易の禁止に至るおそれ自殺したという説（噂1）、同様の理由で後任者への露見を恐れた同僚の所業による毒殺説（噂2）がある。いずれも確証はない。③の病気説はすでに死亡した日の夜にある記録（日誌）に記載されている。もっとも6カ月以前から健康を損ねていたとの事であったが、その症状が計画的な毒殺の症状であったとも言えるし、或は単なる病状ともいえる。いずれにせよ毒殺説の確証はない。当時の東インド会社は破産の危機にあり、小なりといえども自由な日本との交易の終結というのであれば自殺、毒殺の動機にはなり得る。

ここでも相反するミステリーがある。江戸に上がった時に厚遇を受けて、若い水戸藩主、薩摩藩主が懇切丁寧に江戸城を案内し、交易に極めて高い関心を示したとあるが、一方幕府は薩摩藩を信用せずに、隠密（スパイ、ポリス）で絶えず様子を探っていたし、薩摩藩は遠隔の領地、琉球等を利用して非合法の取引をオランダと行っていたことも考えられる。この厚遇は実際には裏で行われていたこのような薩摩藩と非合法商取引を隠蔽するものであったかもしれない。いずれにせよ死の原因はチフスによると考えられるが、永遠の謎である。

次にヒュースケンについて

ヒュースケンは余り称えられることの無い英雄ともいうべきで、彼無くしてはタウンゼントハリスも、他の12ヶ国も同様に日本との通商条約の締結は出来なかったであろう。彼はそれらの国を十分に支援した。

1982年の後半に私が麻布の広尾に移って、翌1983年1月15日、南麻布の光林寺にヒュースケンの墓場があるとの表示を見た。彼が襲撃されたのが1861年1月15日であるので、全く同じ日という大きな偶然から、彼に興味を持ち始めた。爾来年に一度1月に20人ほどの仲間とともにお参りしている（講師はDead Dutchman Society 会長）。当日暗くて雨模様で、赤羽橋で、プロシアからの招待の会食を終えた帰途、5人の覆面をした侍に襲われて、翌朝死亡した。彼は当時江戸の街をよく馬で出歩いて市民もヒュースケンと言って好意的に迎えていた。当時江戸では浪人が外国人を襲撃するという噂があったがこれが初めてで、その後続く外国人襲撃のきっかけとなった。襲撃者は彼を殺害しようとした意図は明確だった。彼の暗殺の9か月前 水戸藩の志士が大老井伊直弼を襲撃しているのも他の志士に影響を与え、外国人に対する襲撃のある意味ではきっかけとなった。幕府は誰が襲撃したかは知っていたようであるが、黒幕は父が山形の鶴岡の裕福な酒醸造元の清川八郎で有る。彼は襲撃には参加はしなかったが計画をした。薩摩藩の4人が実行犯で、名前も解っているが他の1人は不明である。清川八郎は2年後600人の私兵軍団を編成し、徳川幕府に提供したが、彼も後日幕府役人に襲撃され、殺された。ヒュースケンの暗殺は 高度の目的意識を持った志士によるもので、でテロリストではない。徳川將軍幕府は解体されて、新政府が出来たが、それは志士が求めていたものである。両事件間に関係はないが、ヘンミの場合は死亡の原因が詳らかではないが、ヒュースケンの場合は明確に誰がやったか解っている。我々が出来るのは歴史を見直して、今日ある日本に対してどんな事が有ったかということを知ることです。（講演は英語）